資　料

看護職の大学院への進学ニーズに関する調査

——A 大学の実習関連施設に勤務する看護職を対象に——

江 口 秀 子・吾 妻 知 美

A Study Regarding the Needs of Continued Nursing Education in Graduate Schools

——Subject to Nursing Professionals Working at a Facility Related to Practical Training for University A——

EGUCHI Hideko and AZUMA Tomomi

Abstract : As part of the preparation for opening a Graduate School in the Department of Nursing Rehabilitation at Konan Women's University (master's degree), we conducted a survey using a written questionnaire to nurses working at the facilities used for the university's practical training to study the needs for educating nurses and the educational support system as well as their inclination of going to graduate school at this university. The survey was conducted from July 20 to August 6 in 2009, sent to 2120 nurses working at 7 different facilities. 1551 responded (collection rate : 73.2%). Among them, 1531 were subjected to analysis (response rate : 72.2%).

The age range of these subjects was from their 20s to 60s. Most (751) were in their 20s (49.1%) followed by 450 in their 30s (29.4%). Their average age was 32.1 ± 8.8. 1478 were female (96.6%), 51 were male (3.3%), and average number of years working as nurses was 9.8 ± 8.6 years. More than 60% of them had less than 10 years of actual work experience in this field.

Regarding their willingness to attend graduate school, 414 (27.1%) wanted to do so, about the same percent who gave the same answer in a previous survey.

An analysis of the results disclosed the following :

1. Regarding the aspect of the group who desired higher education, the significant groups are "in their 30s", "male", "married", "have children" and "university graduates".
2. The main reasons for wanting to attend graduate school were, "feeling the necessity of higher expertise in knowledge" and being "willing to review nursing with a wider view". As for what they felt they needed most out of graduate school study, the majority answer was "deepening the professional discipline of self".
3. Regarding what they want from the graduate school, the majority wanted to see a support system allowing them to study and work at the same time, with various learning forms and an updated educational environment.

Key Words : Education at graduate school, master's course, needs for attaining higher education, nursing profession

抄録：甲南女子大学看護リハビリテーション学部大学院（研究科；修士課程）開設の準備の一貫として，本学の実習施設に勤務する看護職を対象に，看護師の教育ニーズや教育支援体制に関するニーズ，および本学大学院への進学の意向について知ることを目的に質問紙調査を行った。調査期間は

2009年7月20日から8月6日で，7施設に勤務する看護職2120名を対象に実施し，1551人から回答が得られ（回収率73.2%），1531人を分析対象とした（有効回答率72.2%）。

対象者の年齢幅は，20歳から60歳までで，20歳代751人（49.1%），30歳代450人（29.4%）の順で多く，平均年齢は32.1±8.8歳であった。性別では女性が1478人（96.6%），男性51人（3.3%）で，看護勤務年数の平均は9.8年±8.6年で，実務経験年数10年未満が60%以上を占めていた。

大学院進学希望の有無では，希望群が414名（27.1%）であり，先行研究の調査と同程度に高いことが示唆された。

その結果を分析したところ，以下のことが明らかになった。

1）進学希望群の背景としては，「30歳代」「男性」「既婚」「子ども有」「大学卒」で有意に高かった。

2）進学希望の主な理由は，「より専門的な知識の必要性を感じている」「幅広い視点での看護を見直したい」であり，入学後のニーズとしては，「自分の専門領域を深めたい」が最も高かった。

3）大学院への要望としては，仕事との両立を図りながら就学できる制度を求める意見が多く，多様な学習形態，および教育環境の整備が望まれている。

キーワード：大学院教育，修士課程，進学ニーズ，看護職

Ⅰ．はじめに

医療技術のめざましい発展に加え，少子高齢者社会の進展により，看護職の役割は質・量ともに拡大し，多様な場における看護実践が求められている。そして，看護師としてどのような方向を目指すのかが問われるようになっている。こうした社会背景のなかで，1992年に「看護師等の人材確保の促進に関する法律」が制定され，基本方針として，「質の高い看護師養成のために，今後需要の増える看護系大学の教員や研究者養成のために，看護系大学・大学院の整備，充実の必要がある」と謳われて以降，一気に看護系大学が増加した。そのような中，2007年に「豊かな人間性を培い，高いヒューマンケアの視点で看護及びリハビリテーション領域の専門職者としての実践力を備え，医療及び保健福祉の分野で，地域社会及び国際社会において活躍できる人材を育成する」という教育目的を掲げ，実践者の育成を目指して甲南女子大学看護リハビリテーション学部が開設した。2010年度に完成年度を迎えることになり，卒業生のスキルアップ及び臨床で活躍中の看護師の更なる生涯学習の場としての大学院（研究科；修士課程）開設の準備を始めた。そこで，看護師の教育ニーズや教育支援体制に関するニーズ，および本学大学院への進学の意向について知ることを目的に，本学の実習施設に勤務する看護職を対象に質問紙調査を実施した。その結果は，本学における大学院教育を構築していく上での貴重な資料となり，今後，大学院教育の充実を図るための示唆を得ることができたと考える。

Ⅱ．研究方法

1. 対象と調査方法

1）対象

A大学の実習施設である7ヵ所の病院に就業する看護職2120名。

2）調査期間

2009年7月20日～8月6日

3）データ収集方法

対象病院の看護部長に調査の目的を口頭で説明し協力を依頼した。同意を得た後，調査用紙および回答用紙を入れるための封筒を回収箱とともに郵送または持参し，看護管理者に配布を依頼した。調査方法は自記式質問紙を用い，記入した調査用紙は厳封をして回収箱に投函するように依頼し，A大学教員が回収箱を回収した。

2. 倫理的配慮

対象者には，書面で研究の目的，方法について説明し，質問紙への回答は無記名であり，個人が特定されることがないこと，調査への協力は強制ではなく本人の自由意志であること，協力しないことで不利になることは一切ないこと，またデータについては統計的に処理され，個人や施設が特定されることはないことや研究目的以外には使用されないことを説明し，質問紙

への回答により研究協力への承諾とした。

質問紙の内容については大学院準備委員会メンバーで検討し，得られた結果の活用については研究者が所属する大学の研究倫理委員会の承認を経て実施した。

3. 調査内容

1）看護師の属性

年齢，性別，結婚の有無，子どもの有無，現在持っている資格，最終学歴，実務経験年数，現在の勤務形態。

2）大学院進学希望の有無とその理由

大学院進学の希望では，「大学院に進学する希望はありますか？」と尋ね，「強く希望する」「機会があれば希望する」「希望していない」「わからない」で回答を求めた。この回答者のうち，「強く希望する」「機会があれば希望する」と回答した者を進学希望群（以下希望群），「希望していない」「わからない」と回答したものを非希望群とした。

希望群に対し，進学の理由について，「進学を希望する理由をお聞かせ下さい（複数回答可）」と尋ね，①より専門的な勉強の必要性を感じている，②幅広い視点で看護を見直したい，③研究の必要性や研究方法の学習の必要性を感じた，④現状に行きづまりを感じている，⑤将来，看護教員になりたい，⑥人から勧められた，⑦その他，から選択させた。

3）大学院で学びたいこと

大学院で学びたいことについても希望群に対し「大学院でどのようなことを学びたいと思っていますか？（複数回答可）」と尋ね，①研究能力を身につけたい，②自分の専門領域を深めたい，③修士の学士を取得したい，④専門看護師の資格をとりたい，⑤教育能力を身につけたい，⑥博士課程に進学したい，⑦その他，から選択させた。

4）大学院進学における希望条件

大学院での希望条件は，「大学院で学ぶにあたりどのようなことを希望しますか？（複数回答可）」と尋ね，①長期履修制度，②昼夜開講，③土曜日開講，④平日の昼間開講，⑤現場で働きながら履修できる，⑥休職・退職して学業に専念する，⑦その他，から選択させた。

4. 分析方法

（1）属性と進学理由と進学希望は記述統計処理した。

（2）大学院進学希望の有無と属性の関連性を分析した。有意差の検定には χ^2 検定を用いた。

（3）統計処理には EXCEL 及び SPSS Staistics 17.0 を用いた。

Ⅲ. 結　　果

配布施設 7 施設において，質問紙の配布数は 2120 人で，そのうち 1551 人から回答があった（回収率 73.2%）。施設ごとの配布数，および回収数，回収率は表 1 に示したとおりである。ただし，今回の調査は大学院進学に関する調査であるため，現在准看護師のものは対象から除き，1531 人を分析対象とした（有効回答率　72.2%）。また，対象者の中には大学院修士課程修了者が含まれているが，これは看護系大学院の修了であるかどうかが不明であり，さらに進学の要因のひとつに専門看護師資格取得があるため，今回は分析対象に含めた。

1. 対象者の背景

対象者の背景については表 2 に示した。対象者 1531 人の年齢幅は，20 歳から 60 歳までで，20 歳代が 751 人（49.1%）と最も多く，ついで 30 歳代が 450 人（29.4%）であり，平均年齢は，32.1±8.8 歳であった。性別では女性が 1478 人（96.6%），男性 51 人（3.3%）であり，既婚者は 446 人（29.1%），子どもを有する者は 346 人（22.6%）であった。

保有している資格（職種：複数回答）では，看護師 1526 人，保健師 205 人，助産師 57 人であり，その他の職種では，専門看護師，認定看護師，ケアマネージャーなどがあった。

看護基礎教育の最終学歴は，専門学校 1050 人（68.6%）で最も多く，ついで看護系短期大学，看護系大学の順であった。その他としては大学院修士課程，あるいは看護以外の大学（通信大学も含む）などがみられた。

現在の勤務形態としては，夜勤のある病棟勤務者が

表 1　対象施設と回収数

対象施設	配布数	回収数	回収率（%）
A 病院	200	162	81.0
B 病院	210	127	60.5
C 病院	130	113	86.9
D 病院	200	199	99.5
E 病院	300	271	90.3
F 病院	290	261	90.0
G 病院	790	418	52.9
合計	2120	1551	73.2

最も多く，70.3% を占めていた。次いで多い（14.6%）外来勤務には，透析室と地域連携室も含んでいる。

また，看護経験年数の平均は，9.8±8.6年で，5年未満が538人（35.1%）と最も多く，次いで5年～10年未満が405人（26.5%）であり，実務経験年数10年未満が60% 以上を占めていた。さらに一番回答数の多かった5年未満を1年未満，1年～3年未満，3年～5年未満に細分すると表2に示すとおりである。

表2　対象者の背景　　n＝1531

項目	区分	人数	%
年齢	20歳代	751	49.1
	30歳代	450	29.4
	40歳代	219	14.3
	50歳以上	90	5.8
	無回答	21	1.4
	平均年齢（歳）±SD	32.1±8.8	
	中央値（歳）	30（20～60）	
性別	女性	1478	96.6
	男性	51	3.3
	無回答	2	0.1
結婚	既婚	446	29.1
	未婚	1077	70.4
	無回答	8	0.5
子ども	有	346	22.6
	無	1035	67.6
	無回答	150	9.8
保有資格（複数回答）	看護師	1526	
	保健師	205	
	助産師	44	
	その他	43	
最終学歴	専門学校	1050	68.6
	看護系短期大学	218	14.2
	看護系大学	192	12.6
	その他	66	4.3
	無回答	5	0.3
現在の勤務形態	主に外来勤務	224	14.6
	主に病棟勤務（夜勤有）	1076	70.3
	主に病棟勤務（夜勤無）	94	6.1
	手術室	91	6
	看護部	24	1.6
	その他	22	1.4
勤務年数	5年未満	538	35.1
	1年未満	114	7.4
	1年～3年未満	224	14.6
	3年～5年未満	200	13.1
	5年～10年未満	405	26.5
	10年～15年未満	208	13.6
	15年～20年未満	114	7.5
	20年～25年未満	132	8.6
	25年～30年未満	72	4.7
	30年以上	45	2.9
	無回答	17	1.1
	平均年数（年）±SD	9.8±8.6	
	中央値（年）	7.3（2ヶ月～39年3ヶ月）	

2. 対象者の属性と大学院進学希望の有無

大学院進学の希望の有無では，強く希望すると回答したのは24名（1.6%），機会があったら希望すると回答したのは390名（25.5%）で，それらをあわせる（以下希望群とする）と414名（27.1%）であった。また，希望していないは928名（60.6%），わからないは183名（11.9%）で，両者を合わせる（以下非希望群とする）と1111名（72.5%）であり，無回答は6名（0.4%）であった（図1）。

これらの回答結果から，欠損箇所のあるデータを除外し，希望群と非希望群に分類し，対象者の属性との関連性をみた（表3–1）。その結果，年齢区分でみる

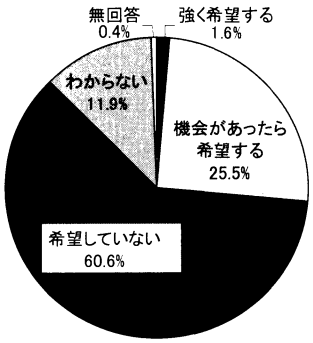

図1　大学院進学希望の有無

表3–1　対象の属性と大学院進学希望の有無

項目		属性	人（%）	p値
年齢	希望群 n＝408	20歳代	168（41.2）	p＝0.001 a
		30歳代	150（36.8）	
		40歳代	74（18.1）	
		50歳以上	16（3.9）	
	非希望群 n＝1098	20歳代	582（53.0）	
		30歳代	298（27.1）	
		40歳代	144（13.1）	
		50歳以上	74（6.7）	
性別	希望群 n＝413	男性	22（5.3）	p＝0.015 b
		女性	391（94.7）	
	非希望群 n＝1110	男性	29（2.6）	
		女性	1081（97.4）	
結婚	希望群 n＝412	既婚	140（34.0）	p＝0.016 b
		未婚	272（66.0）	
	非希望群 n＝1105	既婚	305（27.6）	
		未婚	800（72.4）	
子ども	希望群 n＝376	子ども有	114（30.3）	p＝0.007 b
		子ども無	262（69.7）	
	非希望群 n＝1000	子ども有	231（23.1）	
		子ども無	769（76.9）	

〈注〉a：Mann-Whitney の U 検定
b：Pearson の χ^2 検定 Fisherno 直接法

表 3–2　対象の最終学歴・実務経験年数と大学院進学希望の有無

項目	属性	希望群　人(%)	非希望群　人(%)	合計人数	検定
看護基礎教育最終学歴	専門学校	253(24.2)	794(75.8)	1047(100.0)	
	短大	62(28.4)	156(71.6)	218(100.0)	
	大学	78(40.6)	114(59.4)	192(100.0)	
	合計	393(27.0)	1064(73.0)	1457(100.0)	p<0.01
実務経験年数	1 年未満	27(26.7)	74(73.3)	101(100.0)	
	1 年～3 年未満	52(24.6)	159(75.4)	211(100.0)	
	3 年～5 年未満	37(19.2)	156(80.8)	193(100.0)	
	5 年～10 年未満	91(23.2)	301(76.8)	392(100.0)	
	10 年～15 年未満	74(36.6)	128(63.4)	202(100.0)	p<0.05
	15 年～20 年未満	42(38.9)	66(61.1)	108(100.0)	
	20 年～25 年未満	41(33.1)	83(66.9)	124(100.0)	p<0.01
	25 年～30 年未満	14(20.9)	53(79.1)	67(100.0)	p<0.01
	30 年以上	7(16.3)	36(83.7)	43(100.0)	
	合計	385(26.7)	1056(73.3)	1441(100.0)	

表 3–3　勤務形態と大学院進学希望の有無

項目	所属部署	希望群 人(%)	非希望群 人(%)	合計人数
勤務形態	外来	59(27.7)	154(72.3)	213(100.0)
	病棟(夜勤有)	270(26.1)	763(73.9)	1033(100.0)
	病棟(夜勤無)	26(30.6)	59(69.4)	85(100.0)
	手術室	22(25.6)	64(50.0)	86(100.0)
	看護部	10(50.0)	10(50.0)	20(100.0)
	その他	6(30.0)	14(70.0)	20(100.0)
	合計	393(27.0)	1064(73.0)	1457(100.0)

と，希望群は 30 歳代で有意に高く，性別では，女性に比べ男性のほうが有意に高い。さらに既婚者および子どもありで有意に高かった。

看護基礎教育の最終学歴では，大学卒業者の希望群が有意に高く，実務経験年数では，10 年～15 年未満と 15 年～20 年未満の希望群が有意に高い。これは，年齢区分では 30 歳代の希望群が高いという結果と一致する。逆に 3 年～5 年未満では希望群が有意に低い結果がみられた（表 3–2）。

また，勤務形態別にみると，看護部所属の看護師が合計数 20 名と少ないが，希望群と非希望群がそれぞれ 50% を示した以外は，どの勤務形態においても希望群は 25～30% であり勤務形態による差はみられなかった（表 3–3）。

3. 大学院進学希望の有無とその理由

大学院進学希望群 414 名の進学を希望する理由（複数回答可）としては，「より専門的な勉強の必要性」と回答したのは 281 名（67.9%），「幅広い視野で看護を見直したい」と回答したのは 265 名（64.0%），「研究の必要性」86 名（20.8%）であり，いずれも臨床看護への志向性を示す理由であった。また，「現状に行きづまりを感じている」が 66 名（15.9%）であり，

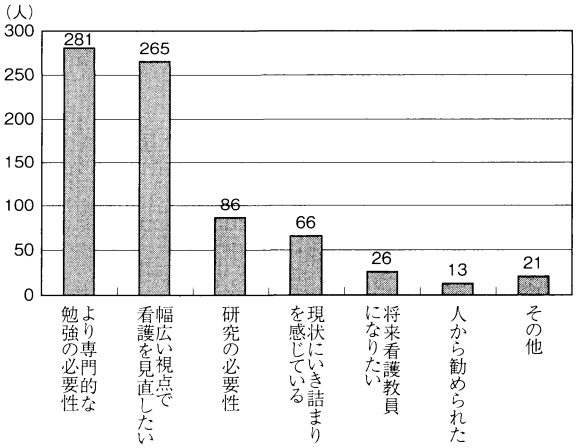

図 2　大学院進学の希望理由

現状を打破するためのひとつの手段として大学院での学びに期待する傾向がみられた。さらに「将来看護教員になりたい」26 名（6.3%），「人から勧められた」13 名（3.1%），「その他」21 名（5.1%）であった（図 2）。

大学院で学びたいこと（複数回答可）では，「自分の専門領域を深めたい」と回答した者が 323 名（78.0 %），「専門看護師の資格をとりたい」が 105 名（25.4 %）で，臨床における実践能力の向上や専門領域のエキスパートを目指した回答が最も多く，次いで「研究能力をつけたい」が 100（24.2%）名，「教育能力を身につけたい」が 82 名（19.8%）と，臨床看護における指導・教育・研究という後輩育成や自己の能力アップに関連した回答が続いた。さらに「修士の学位をとりたい」が 98 名（23.7%），「博士課程に進学したい」が 17 名（4.1%）と，学位取得を目標とする回答も約 4 分の 1 みられた。「その他」は 11 名（4.1%）であった（図 3）。

希望する専門領域に関する回答は表 4 に示すとおり

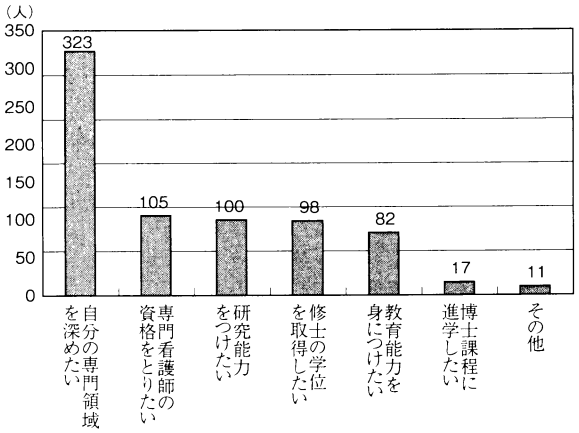

図3　大学院で学びたいこと

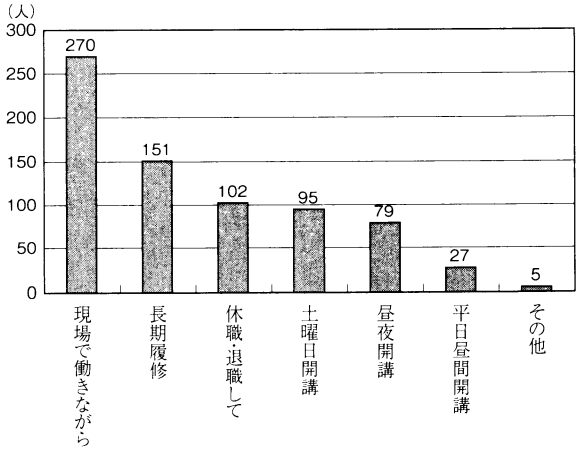

図4　大学院進学における希望条件

表4　希望する専門領域

	分野	人数
専門看護師領域	がん看護	10
	急性・重症患者看護（クリティカルケア）	5
	精神看護	4
	小児看護	3
	家族支援（家族看護）	3
	老人看護	2
	母性看護	2
	慢性疾患看護（慢性看護）	2
	地域看護	1
認定看護師領域	救急看護	7
	がん化学療法看護	6
	緩和ケア	6
	集中ケア	4
	皮膚・排泄ケア	3
	感染管理	1
	訪問看護	1
その他		4

で，「がん看護」が最も多く，次いで「急性・重症患者看護」であった。その他としては，専門看護師領域および認定看護師領域のどちらにも入らない災害看護，ターミナルケアなどがみられた。

4. 大学院進学における希望条件

大学院進学要件としては，「現場で働きながら」と回答したものが270名（65.2%）で，「休職・退職して」が102名（24.6%）と働きながら進学を希望する者が多かった。そのため，希望条件としては，「長期履修制度」が151名（36.5%），「土曜日開講」が95名（22.9%），「昼夜開講」が79名（19.1%），「平日の昼間開講」が27名（6.5%）と，多様な学習形態の希望がみられた（図4）。

Ⅳ. 考　　察

1. 大学院進学に対するニーズ

A大学の7ヵ所の実習施設に勤務する看護師の大学院進学に対する希望は「強く希望する」「機会があれば希望する」と回答した者が414名（27.0%）であった。先行研究では，26%[1]～15%[2]とあり，本調査の対象者の進学に関するニーズも先行研究と同程度に高いことが示唆された。また，進学を希望する理由については，「より専門的な知識の必要性を感じている」「幅広い視点での看護を見直したい」という理由が多く，大学院で学びたいことについてもの理由も「自分の専門領域を深めたい」とする理由を選択した者が8割であった。

看護職に対する役割への期待が変化してきている現在，看護基礎教育における専門職業教育だけでは複雑化，多様化した現代社会には対応できないことを，現場の看護師は実感していると思われる。さらに，専門看護師，認定看護師をはじめとする様々な看護実践に関る資格があり，生涯教育として形に残る学位や資格取得に対するニーズが高まっていると推測される。

また，背景別にみると，「男性」，「既婚」，「子ども有」「大学卒」で進学希望が優位に高かった。さらに，30歳代の進学希望者が多かった。平井らの調査では，20歳代，30歳代の進学希望が多いという結果であったが[3]，本研究では，20歳代の希望は低く30歳代での希望群の比率は高かった。30歳代の進学希望の多さは，臨床現場において指導的役割を担うことによる専門能力を向上させたいという思いや，看護職を継続するための次のステップとして進学を考えていると推測される。また，「子ども有」群で希望が多かったのは，希望群で有意に高かったのが，30歳代および既婚であったことが影響している可能性がある。これらの変数の因果関係については，今後詳しく検証していく必要がある。

本研究の対象者は臨床経験が5年目以下の割合が高かった。この時期は，一人前レベルの看護師として未熟さが見られるが，臨床での不測の事態に対応し管理する能力をもちはじめ，ようやく臨床の世界が整理されて見えてくる段階であるといわれている[4]。そのため，臨床現場に慣れることが優先されていることが示唆された。

さらに，本調査対象者の男性看護師が占める割合は3%（51名）であったが，その中でも進学を希望するものは4割を超えており，女性よりもキャリア志向の強いことが明らかになった。また，最終学歴においては大学卒の進学希望が高いのは，看護系の大学大学院が増えたことにより，看護基礎教育のなかで大学院を身近に感じていることが伺える。逆に，短期大学および看護専門学校卒業生は，通信教育などで学位を取得するか大学院の受験資格審査を受けなければならないというプロセスが，大学院進学へのハードルを高くする要因のひとつになっていると考える。

2. 入学後のニーズ

大学院で学びたいことでは「自分の専門領域を深めたい」と回答した者が8割弱であった。さらに「専門看護師の資格をとりたい」「研究能力をつけたい」「修士の学位をとりたい」「教育能力を身につけたい」といった回答が2割前後であった。大学院進学に対しても，「現場で働きながら」，「長期履修制度」の希望が多く，そのため，「平日昼夜開講」と「土曜日開講」を希望する者も多かった。

希望する専門領域では，「がん看護」「急性・重症患者看護」「感染管理」「小児看護」などの専門看護師を希望する回答のほかに，「がん化学療法看護」「皮膚・排泄ケア」「緩和ケア」といった認定看護師の分野名を挙げている回答もみられた。看護系大学大学院では，看護系大学協議会認定の専門看護師のカリキュラムのほかに，日本看護協会の認定看護師教育課程を開設している場合がある。そのため，大学院教育の目的と大学が開設している生涯学習のためのコースについての理解の混乱がうかがえる。したがって大学院における開設コースの周知の徹底と，対象者のニーズに対応した専門分野の充実を図る必要がある。内田らの調査では，修士課程に対する認知度が低く，受験資格を満たさないが進学希望をしていることや，長期履修制度や昼夜開講制度に関する認知度も低いと報告されている[5]。本学の大学院開設に向け，その教育内容や方法に関するアピールを具体的に行うことが必要であろう。

大学院への要望，研究分野の開設に関して，仕事との両立を図りながら就学できる制度を求める意見が多かった。これは小松ら[6]が行なった愛知県の調査とも同様の結果であった。本調査の入学希望者は，既婚，子ども有の対象者が多かった。先行研究において，進学希望者が「進学を妨げる」とした理由では，「職場の調整が困難である」「長期にわたる場合に休職などの身分制度の仕組みがない」「経済的に無理」といった理由と，少数ではあるが「家族の協力が得られない」といった理由も見られた[7]。また，廣瀬らが行った山梨県での調査では，大学院への進学における困難として，「経済的に困難」「未就学児がいる」などが挙げられている[8]。本研究結果においても，「休職・退職して学業に専念」よりも「現場で働きながら」の希望が多く，「長期履修制度」や「平日昼夜開講」と「土曜日開講」を希望するなど多様な学習形態を希望する者も多かったのは，このような背景が影響していると推察できる。就学意欲の高い学生の入学促進は望ましいことではあるが，仕事と家庭を両立しながら就学できるよう，教育環境の整備を検討していく必要がある。加えて，臨床現場には専門学校卒者が多いことも考慮にいれた教育方法の検討も必要になってくる。

また，実習施設の看護師のレベルアップは，実習の場を提供してもらう大学にとっても大きなメリットである。そのためには，臨床現場と大学の協働が欠かせない。それぞれが歩み寄った，進学体制と就学体制を整えていくことが今後の課題である。

V．結　　論

大学院（研究科；修士課程）の開設準備として，7ヶ所の実習病院に勤務する看護師2120名を対象に，看護師の教育ニーズや教育支援体制に関するニーズを知ることを目的に，質問紙調査を実施した。その結果から以下のことが明らかになった。

1）A大学の7カ所の実習施設に勤務する看護師の27.1%が進学を希望しており，その主な理由は，「より専門的な知識の必要性を感じている」「幅広い視点での看護を見直したい」であり，入学後の学習ニーズとしては，「自分の専門領域を深めたい」が最も高かった。進学希望群の背景としては，「30歳代」，「男性」，「既婚」，「子ども有」，「大学卒」で有意に高かった。

2）大学院への要望としては，仕事との両立を図りな

がら就学できる制度を求める意見が多く，「長期履修制度」や「平日昼夜開講」「土曜日開講」など多様な学習形態，および教育環境の整備が望まれていた。

謝辞

業務多忙にも関らず調査に協力をいただいた実習施設の看護職の皆様に心より感謝いたします。

文　献

1）平井さよ子，海老真由美，山田聡子他：看護職の大学院への進学ニーズに関する調査．愛知県立看護大学紀要 2002；8：33–40

2）松下年子，岡部恵子，天野政美他：大学病院関連医療施設に就業する看護師の大学院修士課程入学への関心．日本看護研究学会雑誌　2009；23(4)：39–50

3）前掲書 1)

4）Patricia Benner 著，井部俊子監訳：ベナー看護論　新訳版　－初心者から達人へ，医学書院，東京，2005, 22

5）内田宏美，津本優子，小林祐太他：島根県内の看護師のキャリア・ニーズと修士課程看護学専攻に対する認識。島根大学医学部紀要　2008；31：59–64

6）小松万喜子，平井さよ子，曽川葉子他：愛知県看護大学の教育改革に関する調査（1）－本学大学院への進学及び修了者雇用に関するニーズの総括－．愛知県立看護大学紀要　2005；11：69–78

7）前掲書 5)：63

8）廣瀬幸美，松下優美子，石田貞世他：山梨県内看護職者の大学院（専門看護師課程）への進学に関するニーズ実態調査（その 1）－看護職者への調査－．山梨県立大学看護学部紀要　2008；10：83–91